

二〇二〇年(令和二年)十一月一日發行(毎月一回一日發行)

香蘭

第九十七卷第十一号

村野次郎創刊

香蘭

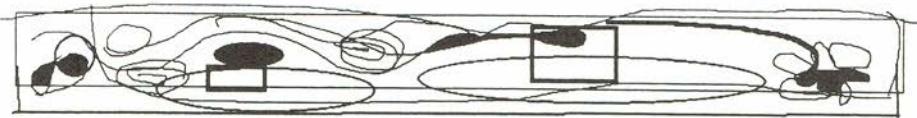


2020年(令和2年)11月号

第97卷

第11号

通卷1079号



香 蘭

2020年(令和2年)11月号
第97卷 第11号 通巻1079号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌 (63) 脇谷房子 : 表二
作品 推薦香蘭集 :

一 二

香 蘭 集 :

三

作品一 特選 (九月号)	相川・朝香・石井・市川・伊藤(美)・伊藤(康子)	42	41	34	26	2
作品二、三特選 (九月号)	青山・小山・沙阿羅・牧田・松沢・武藤・山下	16				
村野次郎への旅 (128)	小林(純)・安田・渡邊(典)					
歌の生まれる場所 (94)	千々和久・幸					
七首抄 (九月号)	工藤・三澤・山本(田)・中野					
エッセイ・自由研究 ドイツの旅	岡野・甫江					
私の読む現代短歌 (4) 森岡貞香の不思議な調べ	青山・侑市					
焦点 点 (九月号) 「短歌はしょせん溜息」とは	田中・あさひ					
作品評 (九月号) 作品一	木桂子					
作品二	鈴礼比子					
作品三	渡辺江和田					
文法あれこれ (18)	木田口					
緑地帯	田代綱					
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向	田中明子					
歌集管見 関谷啓子歌集『最後の夏』評	田中あさひ					
歌会及び会合・会員消息・他	井京子					
編集後記・新宿日記	重田					
表紙絵	71 68 66 64 62 60 58 56 54 52 50 48 47 22 20 18	42	41	34	26	2
表二	74					
和田	71 68 66 64 62 60 58 56 54 52 50 48 47 22 20 18	42	41	34	26	2
雄	74					
表三	71 68 66 64 62 60 58 56 54 52 50 48 47 22 20 18	42	41	34	26	2

村野次郎作品 私の愛誦歌 (63)

みつつ通る濠には鴨の今日見えず
曇れる空をただうつしたる

これは『櫻風集』の、「濠の鴨」一連五首の最後の歌で、昭和四年の作品である。

一首目に置かれた、〈濠端の柳根かたによる波の光りこまかに日の暮れ寒し〉の歌から、皇居のお濠が浮かんだ。毎日そこを通つておられた村野先生のお姿が想像される。

いつもいる鴨が、今日はどこかへ飛んでいったのか見あたらない。もしかしたら渡りの季節で北へ帰つて行つたのかも知れない。その水面には、曇りがちの空が、ただしずかに映つているばかりである。

先生は、今日もいつもの鴨に会えるかも知れないと、期待しながら、ここまで来られたかも知れない。少し心寂しい思いの先生が浮かぶ。

これは先生が三十四、五歳の時の作品である。馴染んだ風景の、少しの違ひも見逃さない、歌人の鋭さと、鴨へのとどめやさしい眼差しと、心の寂しさが感じられて好きな作品である。

(短歌新聞社文庫『櫻風集』98頁、『村野次郎三百首』には収録されていない)

四選者の作品

歌誌を読む

平塚 千々和 久幸

うすべにの芙蓉咲く径夕の径仕事を終へて帰るこの径
くきやかな山の稜線見上ぐれば抱ける鬱もやがて融けゆく

我孫子 丸山 三枝子

コロナ禍に遅刊、休刊の見当たらずどの歌誌もいつもの顔して届く
親しみし歌人の死してそののちは歌誌の届けど読まずなりたる
コロナ禍の歌蔓延らせおおかたは人畜無害、世は事もなし
寝そべってでんでれでんと歌誌読んでいるなど余人に言つてはならず

歌誌歴は六十余年「香蘭」をひと筋に生き老いさらばえつ
「香蘭」があるから明日も生きられるなどと恰好つけるなよ　おい

リビングと書齋、トイレのカレンダー白紙のままにこの月も過ぐ
妻あらぬわがアパートの厨辺に造花を飾り時に眺むる

八月の街 鎌倉 香山 静子

長梅雨の明けとうとつに夏きたり出奔願望すでに萎えたる
届きたる白桃を箱よりとり出だす赤子を移すねんごろさもて
狂おしく蟬なきしきるひもすがら電信柱は佇ちつくすのみ
育ちすぎた苦瓜ふたつベランダに身をもてあまし雨を見ている
きのう来た鳩が今日は長居して戸口に甕の水を飲みいる

ベランダの壁にきて鳴くみーんみんもうすぐ死ぬよミーンミンミン

食前の一一杯なれど「来福」は香りて沁みてのみどをくだる

世界の中心 東京 桜井京子

なかなに収束しないコロナ禍を避けんとしつかりマスクをつける
この辺には人がゐない少しの間マスクはずして伸びのび散歩
コロナ禍と暑さの収束願ひつつ八月の街をひとつそりとゆく
暑い暑いと言つて居られず今日からは歌会始まる九月なんです
わくら葉のはらはら散り来る桜径この暑さでは優雅と言へず
コロナ禍と猛暑に蟄居の日々なれどさりとて何もする気になれず

待たぬやう待たせぬやうに行きたるにアルタ前にて傘まはしをり
あでやかに鬼ゆり咲いて昼深しヘクソカズラのからみつくまま
オレだけが世界の中心といふやうな小道の蝦蟇よ自転車が通る
街裏のマンホールより滲み出づるひとところあり光をもてる
夏風邪を決めこみ今日は寝てゐますさうはさせぬと校正が来る
弱いやつはいちめていいといふやうなある夜のメール狼からの
夕食はいまだに夫にまかせきり今日はくだけの照り焼きが出る
ベランダに蟻が来てをり百年後もアリと暮らしてゐるんだらうな

作品一特選



(九月号作品から)

丸山三枝子 選

表 情

川越相川公子

こんな良き表情をするわれがある節分草を背景の写真

この夏のひとつ良きこと風蘭が六年ぶりに花芽をつけた

キヤンディをわれにねだりしカシユガルの児は健やかかけふ黄砂ふる

黄砂ふれば思ひ出すなり逝きし師と講演さきて帰りし夕べ
愛情をプラスしてねと添へられて筍ごはんのレシピがとどく
ゆき場なき離かざられし談話室 母の役目を終へし吾もゐる

一首目の自愛にも、六首目の自足にも母の役目を終えた満足感が滲む。

橋くぐるまで

東京朝香

橋くぐるまで 黄心樹のかたわらを過ぐ

狙いさだめ小魚とらえし青鷺がめぐりの鴨に高だかと見す

朝早く歩める道を紫陽花の途切るるとなく彩りており

この家の主の撮りしかわせみか岸辺の家の戸口を飾る

川上へ飛び立ちゆける白鷺の二羽を見送る橋くぐるまで

はつ夏の天城の山を顕たしめて山法師咲く籠もれる日々に
・自然への親しみを詠む激みないリズムが、豊かな情感を生み出す。

花うつぎ

習志野石井雅子

花うつぎ石榴花咲ける水辺には雨の日早く夕暮れがくる

こんなこと言つては何だが言つてみるコロナを知らず逝きしは幸と
夫亡くし鬱になりしとふ人のゐて面ざしやさしくちなしの花

ITのトラブルあれば子が頼り「あなたなしでは生きてゆけない」

好物は妻のおからの煮物とふ前衛歌人の塚本邦雄

・四首の大仰なけぞりも、五首目のエピソードの発見も作者の世界だ。

賞味期限なし

東京市川義和

入院時の残りものでと友からのマスクが届く卯月夕暮れ
離れ住む母より届くゆうパック「品名マフラー」中身はマスク

マスク今不足どきなれば「マフラー」と敢へて書きしと文にありたり
亡き父が療養せしは七年前買ひ置きしマスクの残りであるよ

さう言へば賞味期限のなきマスク七年経てもすぐし使へる

・マスクに拘つた一連五首目の、ユーモアに滲む父母への思いは深い。

咲笑

川崎伊藤美恵子

軽トラに積まれて千葉から筍が練をお供に売られにきたり

金蓋花ことしさとりわけよく咲いてわが家の仏をうんざりさせる

アラジンがランプこするがいっしんにコーヒー豆を夫は挽くなり

赤く点る東京アラートまがまがし小池百合子の咲笑聞こゆ

虹色の傘より生えた小さな足父互にうごいて通学路ゆく

・一首目の常識を反転させる把握と、三首目の比喩の妙味に打たれた。

・塙辛トンボや立葵との取り合いで、軽妙に政治の貧困を告発する。

ツツピー 東京伊藤康子

近くて遠し 横浜長野道子

静けさの積もり重なる校庭よりツツピーツツピー鳴く声響く
さざくれた耳が思わずかまえたツツピーツツピー染み込んでくる
聞く耳を持たずにスルーしてたんだ小鳥の声も人の言葉も
ツツピーと検索すればシジュウカラの映像一気に流れ始める
やせっぽちの曲がつた胡瓜と聞こえたか太く真っ直ぐ育つてみせた
・結句で立ち上がった三首目、肉声の聞こえる五首目の機知に注目した。

ワンドフルな日 東京工藤渕子

空っぽの 東京西野美智代

栄華極めしソロモンにして「空の空」と歌いし此の世に九十年生く
「香蘭」の創刊の年に生れしわれその半生を寄りて詠み来し
「九十歳ワンドフル」と言いし友は逝き残りしわれのワンドフルな日日
頭腦明晰などと言われて苦笑い我のみの知る思考の衰え
行く先の分からず途方にくる夢醒めて想えりわが終の日を

・数詞が利いており、作者のワンドフルな境涯詠の尊さに敬服する。

うるさい 東京坪裕

梅雨の花 川越満木好美

安倍さんも歳を取つたね複眼でこの世を見ている塩辛トンボ
立葵天に向きつつ咲き継ぐが安倍さん人気下がりっぱなし
貧困にもいろいろあるが我々に最もあわれな政治の貧困
くさ原を行けば沸き立つ紋白蝶怪しいぬめと我にまつわる
薰風にそよぎいるのに三密を避けマスクを付けろとうるさい
感染者減った増えたと騒ぎつつ不安ばかりが深まる皐月

・四首目の夫の背広の色を「紺色のローン」と見做したセンスを買いたい。
・塙辛トントンボや立葵との取り合いで、軽妙に政治の貧困を告発する。
・塙辛トントンボや立葵との取り合いで、軽妙に政治の貧困を告発する。
・塙辛トントンボや立葵との取り合いで、軽妙に政治の貧困を告発する。

・塙辛トントンボや立葵との取り合いで、軽妙に政治の貧困を告発する。

・塙辛トントンボや立葵との取り合いで、軽妙に政治の貧困を告発する。

・塙辛トントンボや立葵との取り合いで、軽妙に政治の貧困を告発する。

・コロナ禍と体調の不如意、夫の挽歌がおのずから作歌に繋がる。
たつぶりと雨をふくみし紫陽花のはなふさ斜めに傾いてゆく
ひと晩に二センチほどを伸びており庭に育てる胡瓜の長さ
わが子らを見守るような楽しさに胡瓜が育ちトマト色づく
花びらが真っ赤な色して反りかえり炎のごとしグロリオーサは
活けてある花の名前をめずらしく夫が聞きくる 雨は上がるか
・夫唱婦隨の穏やかな日常にも、五首目のような新鮮な発見がある。

作品一、三特選



(九月号作品から)

千々和 久幸 選

頬づえをついて眺める紫陽花のブルーが濃くなるあなたの好きな
・三首目、悲しみを精一杯のユーモアに紡らして哀切。

鬱の六月

相模原 沙阿羅

〈作品二〉

風は夏

米子青山侑市

ウイルスもここまで来ない五〇坪

野菜づくりが自衛になつて

間引きせしツルムラサキの和らぎを一人味はう夕餉のひたしに

スカンボか酸葉と詠むか迷ひゐる荒草むれに伸ぶる穗立ちに

森の中そこのみ明るく灯りゐて紅むらさきの碇草咲く

下野は重き曇りの庭に咲く風のわたらば風になびきて

庭陰に二人静は咲き初めぬ連れの欠けるは世の定めにて

・悠々たるマイペースで日々の歩みを確かめる自然体が良い。

コロナ禍

倉敷小山ヨシ子

コロナ禍の一回きりの面会に必ず帰るとあなたは言つた

圈外でさ迷いおりしメールかなあなたが最後に送ったメール

リムジンでドライブする日がくるなんてあなたは棺に私は助手席

はつ夏の風が位牌をなでゆく「三密」さける車の窓より

花の名が思い出せない あなたから綺麗に活けたと褒められたのに

織月に銳く射らるるわが額は未だ洗礼を受けざる額よ
知らないで今はゐたかつた認知症『長いお別れ』読み了はりたり
なあ、カラスお前に見えるかこの國の風の前なる落葉の末が
薔薇園の薔薇の盛りを巡りつつ一番を探す人間われは
雲間よりもれくる光に燕らの黒き衣がちらちら動く
朝もやのかかる川辺を彩れる紫陽花の魅憂ひにも似て
・題材の眼やかな歌より、三首目の歌境の深まりを探る。

六月多忙

さいたま 松沢 みどり

目覚めたとき思い出すのは今日中にやらねばならぬ仕事三件
会社つてそんなに大事なものなか土曜出勤の朝思うこと
残業をする人のカツラーメンが給湯室の棚に積まれる

遅いから帰つていいよと言われおり所詮女は戦力ではなく

役員の変更により八枚の書類を追加しました 六月

今日の空は少しさみしい 色あせたつじの花びら散つて六月
・会社とは何かを歌で問うことが歌に幅と深みを与えるよう

無言になるな

東京 武藤昭彦

横顔の井川遙に似た人がラッシュに押されて正面に立つ
ハミングの途切れ慌ててノックする風呂では無言になるなよお前
多摩川の堤にカラスの群れが来て鼻にかかるたる音で鳴く
政策がお上であれば下々は網の目くぐる対策をせん

秋ごとに地表を覆う枯れ落葉 地中ふかくに遺跡を隠す
環七のわきにくすめるプラタナス三日づづきの雨に青める

・事柄の面白さで読ませる段階は卒業、事柄の深みを目指せ。

無数の灯

横浜 山下紘正

新緑の楓にそぞろ陽光はひと葉ひと葉を縁取りてをり
力強く繁りつくしてうす闇に雨音のみが深く沁み入る

ひとり座るベンチの上を忙しげにアリ三匹が横切りて行く

マンションの通路に無数の灯がともり夕闇の空に羽ばたき始む

夕暮の水を湛ふる田のうちに苗は整列し風に吹かるる
きびきびと「イチニッサン」の声洩れ来やすみの続きしじムの窓から

・丁寧に描写しているが、歌としての膨らみという事を考えたい。

（作品三）

無重力

横浜小林純子

「ドンマイ」に「ファイト」と返す笑まひつ異端を氣取る性根はなく
良き酒のこと醸さるる歌詠めず蟄居の我にうぐひすは鳴く
美容院やつておらねば自らにハサミで断たむ夜のサンバラ
高處より人が落下す乗り物の名は「青き滝」乗らない二度と

乗るやすぐ地軸の底へ引張られああ無重力地球はどこだ
・独断と割り切りの早さが歌の幅を狭めてはいなか。

果汁をする

行田安田恵子

青麦の穂先を駆ける風の見ゆ追憶の彼方からわれが手をふる
七枚のマスク仕上げて不機嫌な今日のミシンの音の乱調
心臓に七ツ目のステント入れたるにけろり風情の夫と暮らして
公園のナンキンハゼの葉の茂りわれにあたえよ言葉ひとつも
熟れすぎし白桃ひとつもう誰もふりむきもしない 果汁をする
・潜在能力の高い作者、時に四首目のような生煮えもある。

雨のにはひ

鎌倉渡邊典子

呼びもどす時間の影か山梶子は雨のにはひの夕庭に咲く
巣立ちゆきし若きがスマホに送りくる自室の窓の早晚の空
青葉の斑ちらしつつ行く瀬の音の分散和音は夢のなごりか
ほとばしる血流のごと高速道ゆく車列あり国復調
電池二つ替へれば歌ふ時計なりカツコーワルツ毎朝六時に
・輪郭がくつきりしているのは良いが、早口で答を出さぬこと。

村野次郎への旅（128）

「ザムボア」と次郎（二十）

千々和 久 幸

これまで村野次郎作品について勝手な感想

を述べてきたが、氣を引き締める意味から再度、慎吾、次郎の歌評に耳を傾けよう。対象は「ザムボア」（朱樂）第四卷第八號（大正七年）の七月號歌評から、原文のまま引く。

らむ灯影はも見えず

・五月雨の晴間なければ辻車幌かけて車夫ひ
そまりゐるも 池上 秋石

○村野。普通作である別に難はないが此の歌及⑤⑦のごとく上句が「ば」「ど」にて終る時は物を餘りことわり過ぎるから注意しなければいけない。「いや降れば」「ききのよければ」は少々味をやりすぎる様である。

に光れり 深野庫之介

○村野。佳作である。君の中でも一番よいかと思ふ。すぐ頭にビンと来る歌である。生を

注・批評に出た二首の原作を示しておく。

・五月雨の河の面こめていや降れば下る小舟
はぬれそぼちたり

自分等の言ふことを矢張り眞剣に聞いて來れるからであらうこの一首も或程度まで消化されてゐる。

るこここの暮路をゆくも 泉 甲二
葉ざくらのしたの土橋にわらべ來て釣垂る
るこの暮路をゆくも 泉 甲二

○村野。先ず原稿の字の綺麗なと作歌に熱心なのは有難い。此の歌も相當の出来である。

「釣垂るるここ」は「釣垂るるころの」ではなかつたらうが、此の方がよさ相である。下句「暮路を行くも」はおもしろい句である君の歌は一体に強い主觀の表はれ方が少な過ぎはしまいか、尚句法については天爾遠波の使

考へてゐる。この歌は作者として上出來である。ただ二句が下句に對して反省的であるのがいけない。二句は矢張り素直に表現する方が効果がある。
・くりやべの槐の若葉夕ぐれて飯たく煙の中
に光れり 深野庫之介

○村野。佳作である。君の中でも一番よいかと思ふ。すぐ頭にビンと来る歌である。生を深くいくつしむ人にして始めて得られる歌で

この号には北原白秋の「心眼と心耳」というエッセイが掲載されている。それは「前月歌論抄」という見出しのもとにあるもので、

○河野。作者の熱心は少なからず歌を光らす

文末には（珊瑚礁）とあるから、そこからの転載であろう。以下に引いておく。

これは私自身の話である。

葛飾は三谷の紫烟草舎にゐた時のことであるが恰度五月雨のころで、しとしとと雨は朝から晩まで日がないちにち降りそいでゐた。徒然なまことに静かに机の前に端坐して、その雨音を聴いてみると、はじめはただ雨の音だと聴いてゐただけであつたが、しだいに心が澄むで來ると、それがいろいろな雨の音になつて來る。百日紅の葉にふる雨、しだれ柳や松の葉にふる雨、古池の面にふる雨、池のほとりの薪、真菰にふる雨、青い蜜柑の葉にふる雨、垣根の破れた葭賣にふる雨、屋根の萱や瓦にふる雨、朽ちた庇から滴る雨垂、または桶を傳つて落ちる雨水の音、庭石や地面や、濕つた苔の間に沁みこむ雨、さういふのが一つ一つにちがつた音を立ててゐる。それがいつしよに音を立てる。

その中からである。私は松の葉にふる雨の音ばかりを聞きわける事ができるかどうかを試して見た。なかなかである。毎日坐つて聽き惚れてゐるうちに、それが不思議にも、し

だいにわかるやうになつて來た。さうして、幾日かの後には愈々松の葉にふる音ばかりが、しんみりと澄みに澄んだ耳に入つて來た。これなども耳から入つて「心」に達したのである。

身體を鍛へるといふ事も、つまりは「心」を磨きあげることである。つまりは「心」である。俗に心眼とか心耳とかいふものも、この練ひあげた極致のはたらきを云つたものである。

いかにも白秋好みの「藝道の極意」を述べたものである。むろん伝えたかったのは詩歌の根源にある「心眼」であろう。葛飾時代の白秋が、暇に飽かせてこんな実験をしたところが興味深い。

また他結社の作品が「前月歌壇抄」として転載されているが、ついでに見ておこう。

■國民文學
・單衣着て肩の軽きに文机の前に打坐りただく
に居るかも　　窪田　空穂

・さみだれはつぎて降ればま夜の路ぬき湯　　土田　耕平

のにはひ深くこもりり　　松村　英一

・斑々と船のめぐりの草の葉に黄なる塗料の

こぼれたりけり

前田　夕暮

・雨雲の四方に垂りつつかき光りとろめる海　　若山　牧水

にわが船は居る

佐野　翠坡

・人の世のつひのをはりの墓どころあなたの町の屋根白くみゆ　　小田　觀蟬

・打水のしづくしたたる葉ざくらの上のしら　　佐野　翠坡

・雲夕焼けにけり　　佐野　翠坡

・病み臥して幾夜も眠ねば旦つぐる雀の聲は　　佐野　翠坡

待ちがたかりし　　太田　水穂

・雨くるや暗き八つ手の葉のしげみ聲のかぎりを青蛙なく　　尾上　柴舟

・風邪ひきて十日こもりる外に出れば日かけ　　岡　　蘿

・夏めくつよさとなりぬ　　岡　　蘿

・野のうへの畠のくろの鬼つつじ紅ふかく梅　　島木　赤彦

・雨ちかづきぬ　　島木　赤彦

・照る日影おほに明るし山原の木樵りのあと　　島木　赤彦

・の芽立ち煙らふ　　土田　耕平

・春の風終日吹きて夕べ汲むつるべ井の面に　　土田　耕平

・埃浮びたり　　結城哀草果

□ 詩歌

・斑々と船のめぐりの草の葉に黄なる塗料の

こぼれたりけり

前田　夕暮